思いがけないレキの告白
思い出せない鏑の夢

――兵庫県なんでいちばやし

「私を……
呼んでる？」

森に誘う男の囁き

井戸の底の屍に託された
悲かしい過去の伝言

私が見た夢がほんとうのことなら
私は帰って来られなくて——
いつしか雪に降り積もる雪

「罪を知る者に罪はない。
では、汝に問う。
汝は罪人なりや！」

「レキ、私、
井戸の底で
蒼の夢を見つけたよ……」

ラッカの背には
ふたたび
きれいな灰の羽

ふたりだけの秘密は
もう
なくなってしまった

「私のことなど気にかけない、
私は一人になっても
平気だから――」

「そう？」

「私は、あの
兄王子さまには
なりたくないんだ」

レオが気付く
いられる時間はあと少し
彼女と白い日が
彼女を包まれている

「初めて自分で餌を見つけた！
嬉しい！　嬉しい！
これはきっと特別な事だ。
神様が私に遣わしてくれたんだ。
うんと優しくしてあげよう。
ずっと一緒にいてあげよう。
今度こそ私は
クマモリみたいに
良い兄弟になるんだ」

月光に照らされた
クラモリの白髪は
ラッカを探すように
優しく微笑みかけた